

画像によって診療を支える技術者たち

安全で信頼できる検査を心掛けて

自治医科大学附属病院 中央放射線部
診療放射線技師

いしはら ひろあき
石原 寛明

放射線と医用画像のスペシャリスト
「自治医大で放射線技師をやっています」「ああ、あのレントゲンを撮る人ね」

自治医科大学附属病院に就職が決まり、地元であるこの街に帰ってきて今年で3年目。久しぶりに会う親戚や友人、近所の方とこのようなやり取りをしたことが何度かありました。そのたびに「レントゲンを撮るだけが仕事じゃないんだけどなあ」と思うと同時に、放射線技師という職業に対する認知度はまだまだ低いということを思い知らされました。そんなある日、突然私のもとに当コラムのお話が。これはチャンス。というわけで、この場をお借りして診療放射線技師とはどのような職業なのか、お話しさせていただきます。と思います。

近年、チーム医療という言葉が耳にする機会が増えてきていますが、その中で医師の指示のもとに放射線を用いた検査や治療を担当し、医師の診療をサポートしているのが診療放射線技師です。冒頭のレントゲン（X線撮影）はもちろん、体の中を輪切りにして見ることのできるCTや磁石の力を利用したMRI、核医学検査、放射線治療、カテーテル検査・治療など、放射線技師が携わる仕事は多岐にわたります。病院には様々な検査を行うコメディ

カルスタッフがいますが、放射線技師はX線写真やCT画像といった医用画像を多く取り扱うといった特徴があります。いわば「医用画像のスペシャリスト」、それが放射線技師なのです。私は今年で3年目のまだまだ未熟な放射線技師ですが、スペシャリストとしての誇りと高い意識を持って検査をするよう心掛けています。

安心して検査を受けていただくために

一方で、X線撮影やCT検査では放射線を用いた検査になりますのでどうしても「被ばく」という問題が出てきてしまいます。ここ最近では世間の放射線や被ばくに対する関心も高まっております。検査前に「どれくらい被ばくするのか」とか「本当に検査を受けて大丈夫なのか」といった質問をされる方も多くいらっしゃいます。

放射線を用いた検査は基本的に、「検査を行うにあたり、患者に与えるデメリットよりもメリットのほうが大きくなくてはならない」といった考えのもとに成り立っています。ですので、結論を申しあげてしまいますと、放射線検査を受けて体に何か異常が起きるといったことはほとんどない、と考えていただいて間違いはないでしょう。

だからと言って、放射線なんてなるべくなら浴びたくないもの。できるだけ

け少ない被ばくで済ませてほしい。誰もが思うでしょう。検査を受けるうえで避けることのできない被ばく、これを管理し必要最低限に抑えるのも放射線技師の重要な仕事のひとつなのです。例えば胸部のX線写真ひとつをとっても、小柄な女性と体格の良い男性とでは情報を得るために必要なX線の量が違ってきますので、患者さんが検査室に入ってきた段階でその人にあっ

た撮影の条件を見極めて調整をしたり、必要のない部分には放射線を当てないようにしたりと被ばく低減のために様々なことに気をつけ、努力しています。

また、撮影に使用している機械にも患者さんの体型などに合わせて自動でX線量を調整する機能があります。さらに近年ではコンピューターや放射線を検出する装置の性能も上がり、画像を作るのに必要なX線量がどんどん減ってきているのです。近い将来、CT検査もX線撮影と大差ないくらいに被ばくで行えるようになるのでは…なんて話もあるくらいです。このような技術を使いこなし、患者さんにとって安心できる検査にするのも放射線技師の仕事なのです。

多様な職種が働く医療の現場の中で、最前線に立つことが多いのは医師や看護師でしょう。一方で、患者さんにとってのメリットを第一に考え、医師の診断に役立つより良い情報を提供して診療を手助けする役割も不可欠です。診療放射線技師はそんな現代の医療を支える縁の下の力持ちである、と私は考えます。患者さんに安心して検査を受けていただき、安全でかつ有用性の高い検査を行い、放射線技師という立場から地域の医療に貢献できるように今後とも努力を重ねていきたいと思っています。



CT装置とそれを操る放射線技師。技師の腕と技術が合わさり、当院の医療を支えています。